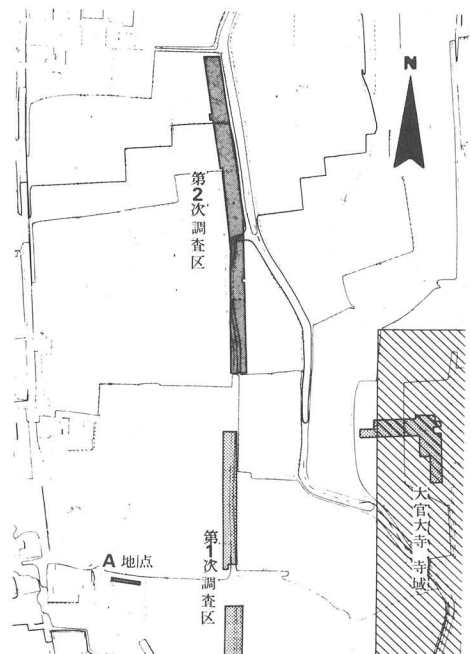


藤原京左京九条三坊の調査（耳成線第2次）

（昭和56年12月～昭和57年1月）

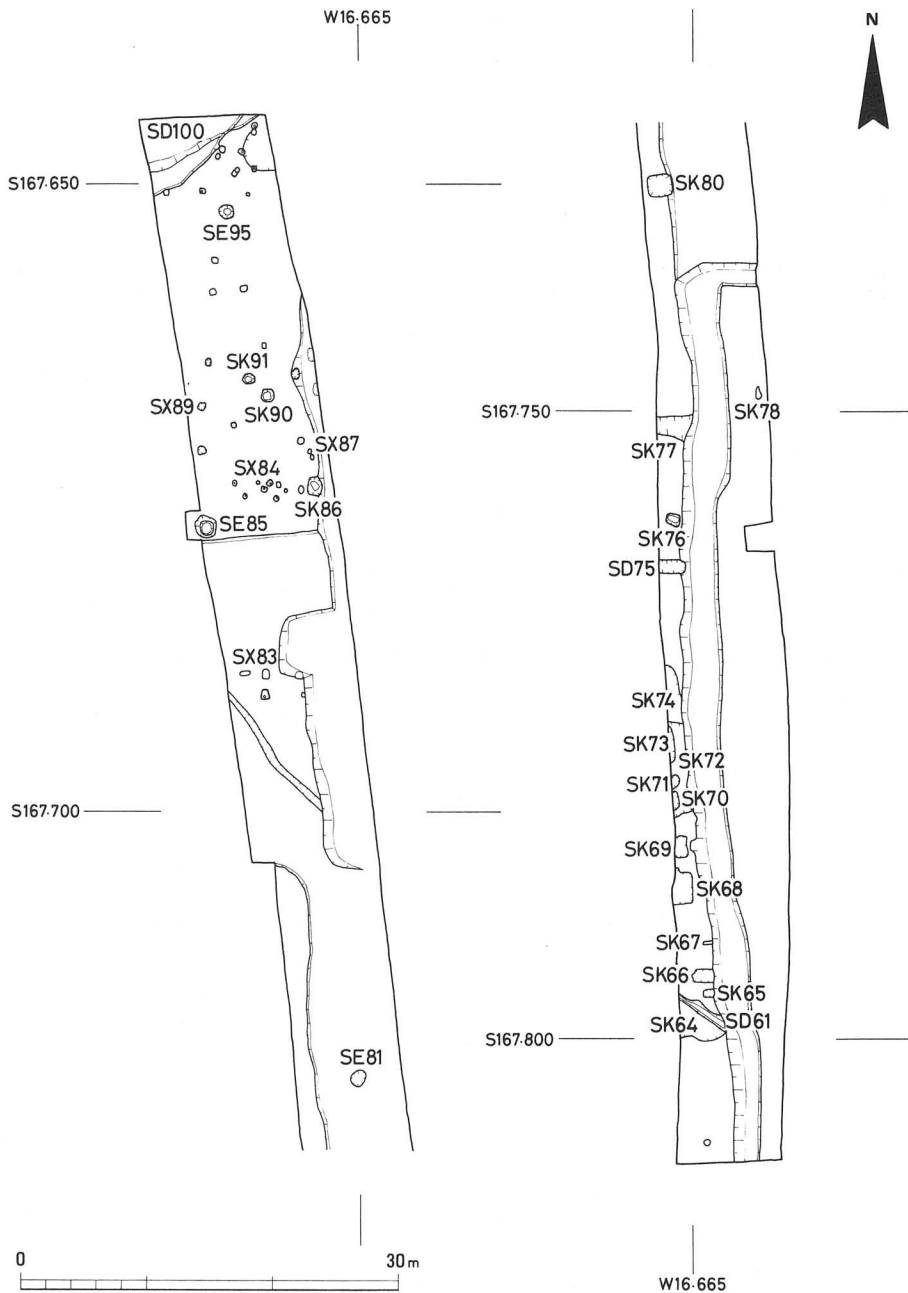
この調査は橿原市出合町から明日香村に至る村道（国道165号～耳成線）改良工事に先立って実施したものである。耳成線関係の調査としては昭和55年に第1次調査を行っており（概報11）、今回は第1次調査地北方の通称百貫川西岸の道路予定地を調査した。なお本調査地北方約50mの橿原市域についても、既に昭和54年に第27～7次調査として調査を実施している（概報10）。調査地は大官大寺の西北方で、藤原京左京九条三坊の北東坪と南東坪の想定地にあたる。九条条間路の存在が予想され、第1次調査で検出した7世紀前半の大規模な整地事業が、さらに北に広がっていることが予想された。調査対象地は南北170m、東西12mの道路敷地のため、南北に長い調査区を設けて行った。

調査地の層序は上から耕土、床土、灰褐色土、黄褐色土（整地土）、茶褐色粘土（地山）となるが、地形の変化に応じて層序が異なる区域もある。調査区の南半は中央に農業用水路が北流しており、この水路の西側に沿う農道下には厚さ0.4～0.6mの整地土層が残存していた。しかし、水路東側の一段低い水田は百貫川の氾濫による削平を受けており、整地土層は一部に薄く残るのみであった。調査区の北半も農道下には整地土層がよく残っていたが、この区域を除いた東側と北側の水田は氾濫による削平を受けており、特に調査区北端から約40mの範囲は整地土層が認められず、灰褐色土下の砂礫層の厚い堆積からみて、かつて旧河道がこの部分にまで広がる時期があった



調査地位置図（1：4000）

ことが判明した。したがって、調査区北端では遺構は砂礫層の上面で検出したが、柱穴や井戸、土壌の堆積土に整地土と同質の黄褐色土が認められる例があり、この区域にも整地事業が及んでいた可能性がある。調査区の南端と北端近くでの整地土層下面の比高差は約 1.1 m で南が高く、整地前の旧地形も南から



遺構配置図 (1 : 600)

北へ傾斜する地形であったことを示している。なお、整地土下の茶褐色粘土層（地山）には、少量の縄文土器と石器が包含されており、弥生時代の遺構はこの上面で検出した。

検出した遺構は弥生時代、7世紀代のもの、平安時代のものの3時期に大別できる。

弥生時代の遺構 調査区南端で検出した弥生時代の斜行構 S D 61 がある。埋土から畿内第 V 様式の壺・鉢・高杯が投棄された状態で出土している。

7 世紀の遺構 井戸 S E 81・85・95、溝 S D 75、土壌 S K 64～74・76・80・86・90・91、柱穴群 S X 83 がある。

調査区中央で検出した井戸 S E 81 は、径 1.1 m、深さ 1.2 m で平面形が円形を呈し、断面形が底部近くで袋状となる素掘りの井戸で、埋土から藤原宮期の土器が出土した。S E 85 は径 1.7 m、深さ 1.4 m の不整円形を呈する素掘りの井戸で、埋土から藤原宮期の土器と大官大寺所用瓦と考えられる熨斗瓦、丸・平瓦が出土したほか、鹹水産の巻貝が 1 点出土した。調査区北端近くで検出した S E 95 は、径 1.1 m、深さ 1 m の不整円形を呈する礫層に掘り込まれた素掘りの井戸で、整地土と同質の黄褐色土を含む埋土上層から飛鳥Ⅲ段階（1・2）の土器が出土した。東西溝 S D 75 は整地土上面で検出した幅 0.9 m、深さ 0.2 m の素掘りの溝で、整地土層が残る部分で 2 m 分検出した。この溝は、位置的に推定九条条間路の北側溝にあたると考えられるが、南側溝は調査区内では検出できず、その性格は今後の調査によって検討を加える必要がある。

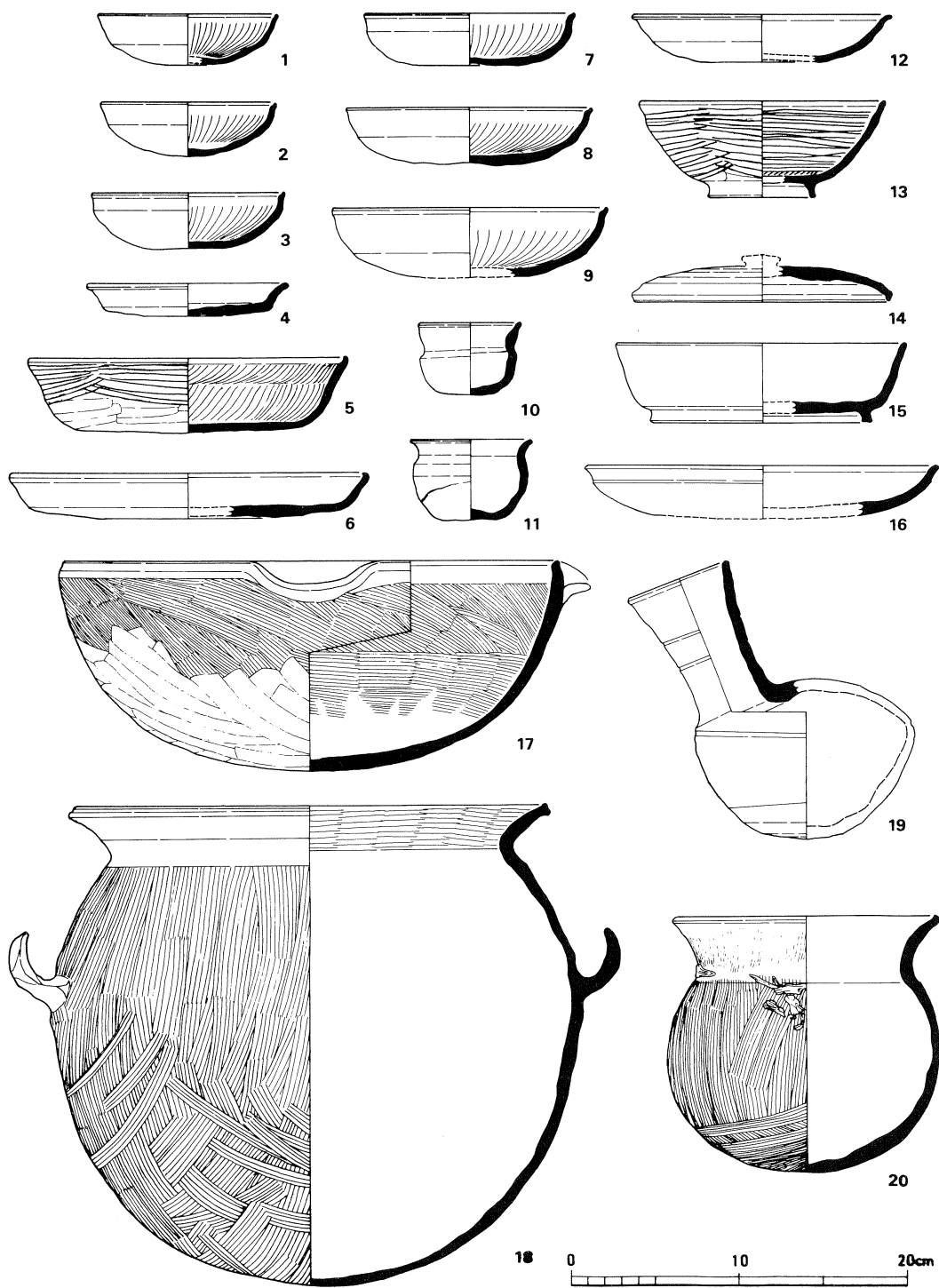
調査区南半では不整形な多数の土壌を検出した。土壌 S K 64～69、72～74 は整地土層に掘り込まれた深さ 0.2～0.4 m の浅い土壌で、埋土は整地土と同質であるが、焼土や炭化物、灰色粘土を含む点が異なっている。埋土から藤原宮期の土器が少量出土した。S K 70・71 は S K 72 の底面でその一部を検出した。他の土壌群とは異なり、その平面形が方形に近い点や、深く掘り込まれている点に注意される。S K 70 は一辺の長さ 1.3 m、深さ 0.4 m、S K 71 は一辺の長さ 0.7 m、深さ 0.4 m を測る。年代を決定できないが、整地土層に伴う遺構と推定される。

土壙 S K 76 は東西溝 S D 75 の北約 3 m の位置にあり、整地土上面で検出した。長径 1.2 m、短径 0.9 m、深さ 0.6 m の楕円形を呈し、大官大寺所用の軒丸瓦 6231 C 2 点と、完形に近い平瓦を含む丸・平瓦片がまとまって出土した。土壙 S K 80 は整地土上面で検出した長径 2.0 m、短径 1.7 m、深さ 0.7 m の隅丸長方形を呈する土壙で、埋土は整地土とブロック状の茶褐色粘土を含み、一挙に埋め戻された状態を示している。藤原宮期の土器が少量出土したほか、西南隅近くの埋土上層から馬骨が出土した。

調査区の北半にある土壙 S K 86・90・91 は砂礫層上面で検出した。S K 86 は長径 1.6 m、短径 1.2 m、深さ 0.8 m の楕円形を呈する。S K 90 は径 1.1 m、深さ 0.7 m の不整円形、S K 91 は径 1.0 m、深さ 0.7 m の 2 段に掘り込まれた不整円形の土壙である。これらの土壙埋土からは、いずれも飛鳥Ⅲ段階の土器が出土した。柱穴群 S X 83 は薄く残存する整地土上面で検出した。埋土は整地土と同質の黄褐色土である。その最大の柱掘形は 0.8×0.7 m の長方形を呈し、柱痕跡を検出したが時期は明確ではない。

平安時代の遺構 いずれも調査区北端の砂礫層上面で検出した。柱穴群 S X 84・87・89 があるが、建物としてはまとまらない。S X 84 は径 0.3 m の不整円形の柱穴を 9 個検出したが、柱穴の大半はその底面に一段深く円形に掘り凹めた部分が認められた。埋土から 10 世紀頃の黒色土器が出土した。S X 87 は径 0.3 ～ 0.5 m の不整円形の 3 個の柱穴である。埋土から 10 世紀頃の土師器が出土した。柱穴群 S X 89 は径 0.6 m の不整円形を呈する柱穴 3 個がほぼ一直線に並ぶもので、埋土から S X 84 と同時期の黒色土器が出土した。なお、旧河道 S D 100 は北岸を検出していないが、深さ 1.5 m 以上の厚い砂礫の堆積層があり、相当の流水があったことを示している。堆積層上層から黒色土器、下層からは磨耗した 7 世紀代の土器と丸・平瓦片が出土しており、その存続年代をうかがうことができる。

出土遺物 調査面積に比して少量ではあるが、縄文時代から中世に至る土器・瓦などがある。土器は 7 世紀代の土師器、須恵器が大半を占めている。整地土層中から出土した土器は少ないが、須恵器平瓶（19）は東海地方で生産さ



出土土器(SE 95; 1・2, SK 90; 3・9, SE 85; 4・11・15・16・20, SE 81; 5~7・
10・14・17・18, SX 87; 12, SX 84; 13, SK 73; 8 整地土; 19)

れたと考えられる特色を有しており、7世紀前半から中葉にかけての年代が与えられ、整地事業の年代と性格を考える上での手懸りを得る資料と考えられる。井戸S E 85から出土した藤原宮朝の土師器甕(20)は口頸部に蔓を巻きつけたと思われる痕跡が残り、釣瓶として用いられたものであろう。

まとめ 本調査では7世紀前半の大規模な整地事業がさらに北に広がることを確認するとともに、7世紀後半の井戸・土壇、平安時代の柱穴群などを検出した。整地土は第1次調査区に比べて0.1～0.6 mと薄くなるが、調査区北端近くまで及んでいたことが判明した。その範囲は第1次調査地を含め南北約330 mあり、東西の範囲については大官大寺第7次調査で黄褐色砂質土を検出し(概報11)、また、今回の調査中にA地点(位置図参照)で緊急に実施した調査で整地土層とその上面から掘り込まれた藤原宮期の土器を伴う溝を検出している。これらが一連の整地事業として行われたとすれば、整地土層の東西の広がりには300 m以上になる。今回の調査では第1次調査と同様、整地土層中出土の土器の年代観から、この整地事業が7世紀第Ⅱ四半期頃に行われたことを確認した。整地事業に伴う遺構を明確にはできなかったが、東西300 m以上、南北330 mにも及ぶ整地土層の広がり出土遺物から、その要因を舒明朝の「飛鳥岡本宮」あるいは斉明朝の「後飛鳥岡本宮」の造営と関連づける先の推定を補強する資料を得ることができた。7世紀後半の遺構は藤原宮期以前と藤原宮期に分けられるが、藤原宮期の遺構としては九条条間路の北側溝と推定される溝1条と、小規模な井戸2基、土壇多数を検出したが、建物の配置やその性格については不明な点が多い。藤原宮以前の遺構についても井戸・土壇などを検出したが、その性格は明らかでない。しかし、大官大寺下層及び第1次調査でも同時期の建物や井戸を検出しており、それらと一連の遺構と考えられる。

以上のように、今回の調査は道路敷部分という限られた調査で、しかも氾濫による削平が著しい調査区ではあったが、いくつかの問題点が提起された。整地事業の年代、性格については、今後、さらにその広がりを追求するとともに、整地土層に伴う明確な遺構の検出をまって検討することとしたい。